

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	大西 永昭
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
論文題目 「中期」芥川龍之介文学の研究 ―売文業者・芥川龍之介―			
論文審査担当者			
主査		教授	有元 伸子
審査委員		教授	久保田啓一
審査委員		教授	松本 陽正
審査委員		准教授	瀬崎 圭二
審査委員	九州大学大学院比較社会文化研究院	教授	松本 常彦
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、従来、「停滞期」として捉えられていた芥川龍之介の「中期」の文学を、出版資本主義下における「売文」を主題化した文学として読み直し、再評価したものである。</p> <p>論文は、序、3部9章からなる本論、結、により構成される。</p> <p>序では、芥川研究の現状を分析したうえで、「時代や社会に無関心な厭世家の芸術至上主義者」と「社会や人生の諸問題に誠実にかかわった闘う作家」という従来の芥川像の二項対立を超える視点の必要性を提起している。</p> <p>第Ⅰ部では、芥川の作家イメージに関する問題を検討している。初めに、「文学」の一大メディア・イベントである芥川賞に関する創設時から現在にいたる言説を検討して、芥川の作家イメージの生成・流通の様相を確認する。また、芥川の作家論的研究を批判的に省察し、芥川文学が前期の歴史小説から後期の自伝的小説への移行として理解されてきたことにより、その中間に「停滞期」と評される時期を生み出したと指摘する。大正8年、芥川は教職を辞め、毎日新聞社に入社して作家専業となるが、芥川文学に「売文」という概念を浮上させることで「中期」の「停滞期」評価が覆る可能性が示される。</p> <p>第Ⅱ部では、「戯作三昧」「十円札」「売文問答」の3作品を対象として、作品に表れた出版資本主義の様相に焦点を当てて論じている。『時事新報』『新潮』などを調査し、大正8～9年の文壇における文学と金銭をめぐる言説を丁寧に検討したうえで、芥川文学に潜在する「売文」というテーマを明示する。出版資本主義の制度下で「書くこと」を強制される作家の姿をメタフィクショナル的表現をとりながら戦略的に作品化する芥川像は、経済問題とは無縁の「芸術家」としての従来の芥川像を相対化するものである。</p> <p>第Ⅲ部では、第Ⅱ部までの考察から導かれた「売文」という概念を手掛かりに、「売文」が主體的に扱われた3作品（「葱」「奇遇」「文放古」）の作品論を展開する。同時代言説の調査や比較文学的考察も交えつつ、芥川が大正期にメタフィクショナルな構造を備える小説を書き得たのは、彼が「売文」の現場に接し、そこで「書かされる」という感覚を強く意識せざるをえなかったことによると結論づけている。</p> <p>結では、芥川の「売文」小説が後年の太宰治や石川淳らのメタフィクショナル的表現やポストモダン文学の先駆形として評価しうることを、文学研究において「文学の商品化」の問題を検討することの有効性を述べている。</p>			

このように、本論文は、従来「停滞期」だと見なされていた「中期」の芥川龍之介を、「売文」する自身の姿を自覚的に描いた作家像として更新することにより、「陰鬱な作家／闘う作家」という二項対立を脱構築していく意欲的な研究である。芥川のみならず近現代文学全体の研究動向に目配りしたうえで、同時代言説の検討をふまえた新視点によって従来の評価からこぼれ落ちていた小説を発掘する一方、必要な批評理論を援用しつつキャノンの作品を再解釈している。優れたテキスト分析と実証性のバランスの良さに加えて、文章力も卓越しており、説得力に秀でた完成度の高い論考である。芥川龍之介研究を大きく前進させる知見に富む論として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。